

叙事詩に見るアブライ=ハンの系譜と生い立ち

坂井 弘紀

はじめに

アブライ Абылай はカザフの著名なハンである。「18 世紀のハンのうち、もっとも強力なハンはアブライであった¹⁾」といわれるように、彼は中央アジアの歴史において、きわめて重要な役割を果たした。近年、彼に関する研究が本格的に行われつつあり、その成果も表れているが²⁾、彼の幼少期などほとんど明らかにされていない問題もある。これは、アブライに関する文献史料が少ないこと、とくに彼の幼少時代について記述した史料が乏しいためである。アブライの名がはじめて文献史料にあらわれるのは、ロシア史料で 1740 年、清朝史料で 1738 年のことであるから、1711 年ころの生まれとされる彼がすでに青年期に達しているころである。カザフのハンの中でも「傍系」とされていたアブライが、青年期のころにはすでに、カザフ社会において少なからぬ実権を握っていた理由や背景を知るには、彼の生い立ちを検討する必要があるが、文献史料には参考になるような記述がきわめて少ないのである。

中央ユーラシアのテュルク系民族には、叙事詩をはじめとする口頭伝承の伝統が強く、数多くの作品がこれまで伝えられてきた。叙事詩には、彼らの「歴史観」が反映され、そこに歴史上の人物や出来事が描かれることが少なくないことは、筆者がこれまで幾度となく指摘してきたことであるが³⁾、アブライ=ハンもまた口頭伝承に謡われてきた歴史上の人物なのである。彼について謡った叙事詩⁴⁾は、彼の勢力範囲や政治構造、周辺地域との戦争や貿易はもちろん、彼の出自や生い立ちも伝えている。

本稿では、アブライの人物像を考える上でのヒントのひとつとして、彼の先祖や少年時代について、叙事詩をもとに検討してみたい⁵⁾。

¹⁾ Бартольд В.В. Работы по истории и филологии тюркских и монгольских народов. Москва, 1968, стр. 224. バルトリドは、中央アジア研究におけるロシアの碩学。

²⁾ 日本では、佐口透『ロシアとアジア草原』吉川弘文館、1966 年、「カザフ民族史料についての覚書」『内陸アジア史論集』1964 年、同『新疆民族史研究』吉川弘文館、1986 年、川上晴「アブライの勢力拡大」『待兼山論叢書』14 号、1980 年等があるものの、本格的な研究はほとんどなされていない。

³⁾ 坂井弘紀「英雄叙事詩が伝える「ケネサル」の反乱」『イスラム世界』44 号、1994 年。同「カザフの英雄叙事詩にひそむ歴史：『エル=タルグン』の歴史背景に関する一考察」『内陸アジア史研究』12 号、1997 年。同「テュルク英雄叙事詩の地域的特徴 - 『チョラ=バトゥル』の分類をもとに - 」『地域研究論集』3 (2)、2000 年。

⁴⁾ アブライなど歴史上の人物を謡った叙事詩は、英雄叙事詩と区別して歴史叙事詩と呼ばれることがある。

⁵⁾ 本稿では、以下の 7 つのヴァリエントを利用した。(1)Аблай хан. Шерияздан Сұлтанбайұлы によるヴァリエント。Тарихи жырлары 1. Аблай хан. Алматы, 1995. 88-129-б. 初出は『哈薩克叙事長詩選 4』北京、1985 年。(2)Сабалак

1 アブライ=ハンの系譜

(1)カザフのハンたち

アブライ=ハンは、モンゴル帝国を興したチンギス=ハンの子孫であった。中央アジアではチンギス=ハンの血を引く者のみがハンの位に就くことができた。それゆえ、アブライもハンに即位することができたのである。

「余は東方のシュングスというハン⁶である。

余はこれより至る所を支配する」と宣した。/

すべての民に恩恵をもたらし、

両手を広げ広大な地域を攻めた。

シュングスには後を継ぐ四人の息子がいた。

彼らはジョシュ、シャガタイ、オゲデイ、トレといった⁷。/

ある者は右をある者は左を支配しようと、

全世界に手を広げそれを目指した。

金帳と白帳のハン国を創り、

家畜を富ませ、金銀を集めた。⁸

詩中にあるジョシュ（ジョチ）は、カザフの諸ハンの祖先で、ジョチ=ウルス、すなわちいわゆるキプチャク=ハン国の創始者でもある。ジョチ=ウルスの名はチンギス=ハンの長子ジョチに由来する。ジョチ=ウルスについて叙事詩は、

ジョシュの息子バトゥは広大な草原に

金帳の旗を指した。

エルティス（イルティシュ）川⁹の兩岸の広大な草原や

Аблай хан. Олжабай Нұралыұлы の語りによるヴァリエント。Тарихи жырлары 1. Аблай хан. Алматы, 1995. 129-143-б. (3) **Sabaraq.** Änwar Qongqan ulı 『哈薩克叙事長詩選 4』北京、1985 年。 (4) **Сабалак.** Мәшһүр Жүсіп の語り。Абылай хан. Алматы, 1993. 228-240-б. (5) **Аблай хан әңгемесі.** Көкбай ақын の語りによるヴァリエント。Тарихи жырлары 1. Аблай хан. Алматы, 1995. 63-87-б. (6) **Аблай хан... Ақ атан.** Ә. Нәбиұлы によるヴァリエント。Тарихи жырлары 1. Аблай хан. Алматы, 1995. 32-49-б. (7) **Аблайдың тарихы.** Шәді төре Жәңгірұлы (1855-1933) の語りによるヴァリエント。Тарихи жырлары 1. Аблай хан. Алматы, 1995. 144-283-б. 以下、各ヴァリエントは下線の引かれた題名で表記する。

⁶ チンギス=ハンのこと。

⁷ それぞれ、チンギス=ハンの息子たち、すなわちジョチ、チャガタイ、オゴデイ、トルイのことである。

⁸ Аблай хан. 88-89-б.

⁹ 西シベリア・カザフ草原東部を流れる河川。

ウラル山、アラル海の沿岸、

カスピ海とサルアルカ(カザフ草原)で、テンシャン(天山山脈)で

ジョシュはハンとなり、国の長となっていた。¹⁰

シュングスハンの孫ベレケ＝ハン、

エディル¹¹に強国を建てた。

トカイ＝テミルはベレケの親族、

ロシアの民を従えて、その土地を併合した。¹²

と語っている。この国は、13 世紀前半にジョチの子バトゥが父の所領を拡大させ、キプチャク草原に起こした国家である。ここでは、叙事詩がジョチ＝ウルスの領域をほぼ正確に表していることに注目したい。

さて、一般に「カザフ＝ハン国」といわれる勢力は、15 世紀中頃にセミレチエ地方で、ジョチの血を引くケレイ Керей とジャニベク Жәнібек によって形成されたといわれている¹³。カザフ＝ハン国の創始者であるケレイとジャニベクについては次のように語られる。

ケレイは6のアラシュ¹⁴のハンとなった。

彼のあらゆる公正な規範が広まった。

ハンの公正さは民の幸福であった。

夏も冬もその性格が変わることはなかった/

ケレイ＝ハンが亡くなった後、

民は彼の代わりにジャニベクをハンに戴いた。/

彼は民を世界を地の果てまでも手にいれて

民衆に公正な模範を示した。¹⁵

このように、ケレイとジャニベクはカザフのハンとして「公正」をもって治めた。「公正さ」はハンにとって何よりも必要とされる条件なのであった。ジャニベクの後、彼の息子カスムが継ぎ、

¹⁰ Аблай хан. 90-б.

¹¹ ヴォルガ川のこと。イテル川ともいう。

¹² Сабалақ - Аблай хан. 130-б.

¹³ Қазақстан тарихы 2. Алматы, 1997. 335-б.

¹⁴ アラシュとはカザフの別称。「六のアラシュ алты алаш」とは「全人民」を意味する。

¹⁵ Аблай хан. 90-б.

ハンとなった。叙事詩では、カスム以降のハンは以下のように列挙されている。

カスム=ハン・ママシュ・タヒル・ブイダシュ・トグム

ハクナザル・シュガイ・サリムがハンとなった。

カスム=ハンほど公正なハンはいない。/

「カスム=ハンの示した道」と呼ばれ、

それは彼らの遺産として後々まで残された。/

外敵が攻めてくればそれを懲らしめて、

タウケル=ハンは強い影響を及ぼした/

エシム=ハンは並みのハンではなかった/

言葉は鋭く考えは賢く動きは巧みで/

「カスム=ハンの示した道」を行い

「エシム=ハンの古い法」を作った。/

父の「エシム=ハンの道」を継いで、

ジャンギル=ハンも栄華をもたらせた。¹⁶

これらの人物の順序はそのままカザフのハンの序列となっており、カザフのハンに関する正確な情報と考えてよからう。

ジャニベクの息子カスムҚасым（統治期間 1511-18）はカザフ社会における統治制度を確立した、初期カザフ=ハン国の名君として知られている。詩の中にもあるように、彼の功績のひとつは、後世までもカザフ社会の規範として伝えられた「カスムの法典」であった¹⁷。「カスムの法典」の詳細については不明な点が多いものの、財産法・刑事法・民事法・兵役法・登用法の五つの法律からなり、これらの適用により社会秩序が安定したといわれている¹⁸。

カスムの死後、カザフ=ハン国の勢力はセミレチエ地方からウラル川流域まで、北はイルティシュ川までといった広大な地域にまで広がった。16世紀にカザフ人はシル川流域への勢力拡大に努めたことから、シル川流域の農工定住民との関係が密接となり、シル川流域のサイラムやヤス（現在のトゥルキスタン）が商業都市として発達した。とくにハクナザル Хакназар（統治期間 1537-80?）の治世には西方へ拡大し、当時分裂状態にあったノガイに従えるなど、彼の時代にカザフ=ハン政権が強化されたといわれる。

¹⁶ Аблай хан. 90-91-б.

¹⁷ Валиханов Ч.Ч. Собрание сочинений в пяти томах. т.1. Алматы, 1967. стр.636.

¹⁸ 蘇北海「哈薩克族文化史」、烏魯木齊、1989年、364頁。

16 世紀末期のタウケル Тәуекел (統治期間 1583?-98) は、ブハラ=ハン国の分裂に乗じて、トウルキスタン、タシュケント、サマルカンドを占領するなどカザフの勢力を拡大したハンであった。また、彼を継いだエシム Есім (統治期間 1598-1628) は、「カスムの法」を引き継ぎながら、それまで用いられていた慣習法を整理した「エシムの古い法」によって統治した¹⁹。

17 世紀中頃のカザフのハン、ジャンギル Жәңгір の後裔については次のように謡われる。

ジャンギル=ハンが死んだとき

アズ=タウケがハンとなって玉座についた。

ハンとなったタウケは国を治めた/

彼は有り余る力とすぐれた知恵をもっていた。²⁰

ジャンギルの死後、タウケ Тәуке (統治期間 1680 頃-1715) がその後を継いだ。祖父エシムが残した「エシムの古い法」を反映させて、タウケが作った「ジェティ=ジャルグ жеті жарғы」は、カザフ史においてもたいへんよく知られている法典である。この法典は、伝統的な慣習法とシャリーア (イスラーム法) とを折衷して作られたもので、イスラーム的要素はとくに婚姻や家庭に関する規定にみられる。たとえば、「ジェティ=ジャルグ」では「一人の男は四人の妻を娶ることができる」と規定していたという²¹。タウケは「ジェティ=ジャルグ」に基づいて政治を行った名君として、その名がよく知られている。

(2) アブライの先祖たちの悲運

さて、ジャンギルにはもう一人、ワリーという息子がいた。カザフの系譜に詳しい、20 世紀初頭の詩人シャカリムによると、「ウルゲンチのガイプ=ハン (カイク=ハン) の娘から生まれたワリバキという子供がいた。ジャンギルの跡を継いでアズ=タウケがハンに即位すると、ワリバキは屈辱を感じ、ガイプのもとへ去った²²」。叙事詩も、

(ワリーは) (タウケの) ハン即位に怒って国を離れた。

彼のナガシュ²³、カイクカンのもとに向かった。

この地に安息を見出して、しばしの間留まった。²⁴

¹⁹ 蘇北海「哈薩克族文化史」、364 頁

²⁰ Аблай хан. 92-б.

²¹ 蘇北海「哈薩克族文化史」、365-369 頁

²² Шәкәрім Құдайбердіұлы. Түрік, Қырғыз-Қазақ һәм хандар шежіресі. Алматы, 1991. 25-б.

²³ ナガシュ нағаш は母方の親戚をいう。ナガシュ=アタ (母方の祖父) やナガシュ=アガ (母方の伯父) などのように使われる。

と、ワリーがタウケのハン即位に立腹して、カイク=ハンのもとに身を寄せたことを伝えている。タウケの即位が 1680 年ころと考えられていることから、ワリーがウルゲンチに向かったのは 17 世紀末のことと思われる。

カイク=ハンのくにをカルマクが襲った。

「アクタバン=シュブルンドウ」の始まりであった。²⁵

そのころ、カルマク²⁶は、カザフ草原南部やカスピ海周辺をはげしく攻撃しており、その際、カイク=ハンのいるウルゲンチも攻めたと考えられる。なお、「アクタバン=シュブルンドウ Актабан-шұбырынды」とは、1720 年代のカルマク（ジュンガル）の攻撃による「大惨禍」を意味する言葉である。叙事詩は、ワリーがそのようなカルマクとの戦いで戦死したと語る。

（ワリバクは）侵入する敵を阻止した。

カザフとカルマクは殺戮しあった。

突然ワリバクが殺された。

彼の一人息子は孤児になった。

生まれたときにアブライと名付けられていた。

幼少から優れており、腕白で乱暴者だった。/

「カンイシェル=アブライ（血を飲むアブライ）」と人々は呼んだ。²⁷

戦死したワリーには一人息子「カンイシェル=アブライ」がいた。「カンイシェル=アブライ」は、アブライ=ハンの祖父であり、彼とは同名異人の人物である。父ワリーとともにカイク=ハンのもとにいた「カンイシェル=アブライ」は、カルマクの猛攻に抵抗し、その戦いの中で勇猛さを見せつけた。カンイシェルҚанішер、すなわち「血を飲む」との渾名は、彼の獐猛さにちなんでつけられたといわれる。

しかし、カンイシェル=アブライもまた父と同様に、カルマクとの戦いで戦死する。そして、彼の自身の運命と同様に、やはり一人息子が残されたと叙事詩は語っている。

（カンイシェル=アブライは）戦いで非業の死を遂げた。

²⁴ Sabaraq. 289-b.

²⁵ Аблай хан Әңгмесі. 63-б.

²⁶ カルマクとは、16-18 世紀にかけてジュンガル盆地を中心に栄えた遊牧国家ジュンガルにたいする中央アジア側からの呼称。

²⁷ Аблай хан. 92-б.

アブライの一人息子が残された。/

(その子には) 父の名を残すために、

ワリーと名づけられていた。

人々はあだ名を合わせて呼んでいた。

「コルケム=ワリー (美しきワリー)」と。

彼自身、その名にふさわしく美しかった。/

カルマクとカザフは殺戮し合い、

敵は容赦無く「美しきワリー」を殺した。²⁸

カンイシェル=アブライの遺子は、祖父の名に因んでワリーと名づけられていた。彼こそが、アブライ=ハンの父である。人々にその美しさを讃えられ「美しきワリー Көркем Уәли」とも呼ばれた名うての勇士であったが、彼もまた祖父や父と同様の悲運を辿り、カルマクによって悲運の最期を遂げたと叙事詩は伝える。アブライ=ハンの先祖について、シャカリムは、「三人の先祖 (ワリバク、「血を飲むアブライ」、「美しきワリー」) はウルゲンチのカイプ=ハンのもとで過ごし、ハンにはなれぬまま亡くなった」と、叙事詩と同様の情報を記している²⁹。

一方、アブライの先祖がトゥルキスタンやタシュケントの支配者であったという説もある。19世紀後半のカザフ知識人で、アブライの曾孫にあたるショカン=ワリハノフは、「彼 (アブライ=ハン) の祖父もまたアブライという名で、トゥルキスタンの統治者であった。彼は戦闘での勇猛さが称えられて、威厳があり、名誉ある称号「カンイチェル (血を飲む) を与えられた」「(「美しきワリー」は) 父 (すなわち「血飲みのアブライ」) の威光を受け継ぐことができなかった。トゥルキスタンを陥落させた近隣の統治者は彼を殺した」と記している³⁰。また、アブライの系譜に詳しい、彼の書記マメドフは、1768年、ロシア政府に「アブライ=スルタンの父や祖父はタシュケントのハンであった」と伝えており³¹、先攻研究ではこの説がワリハノフの説よりも信憑性が高いとされている³²。

以上のように、アブライの祖父や父は由緒あるチンギス=ハンの血統を引きながらも、ハンに即位することなく流浪しながら、次々とカルマクによる非業の死を遂げたと叙事詩は伝える。しかし、このような悲運の血統から、「18世紀の名君」アブライが生まれるのである。

²⁸ Аблай хан. 93-б.

²⁹ Шәкәрім Құдайбердіұлы. Түрік, Қырғыз-Қазақ һәм хандар шежіресі. 27-б.

³⁰ Валиханов Ч.Ч. Собрание сочинений в пяти томах. Т.1. Алматы, 1967. стр.426.

³¹ История Казакской литературы. т.2. Алма-Ата, 1979. стр.41.

³² Сулейменов Р.Б., Моисеев В.А. Из истории казахстана 18 века. Алма-Ата, 1988.стр.23.

2 アブライの生い立ち

(1)アブライの誕生

アブライの出生については詳らかではなく、叙事詩などの口頭伝承のみがその情報を伝えているといえる。彼の誕生について、叙事詩は謡う。

戦で「美しきワリー」は死に、
若い妻は寡婦になりさまよった。
彼女は若く美しい女性であった、
タシュケントの方に嫁ぎにいったのだった。/
お腹には6ヶ月になるハンの子供がいたけれども、
生きていくために嫁いだのであった。
お腹の子供が生まれて/
その子にはアブルマンスルと名づけられた。³³

このアブルマンスルӘбілмәнсүрこそが、のちにアブライ=ハンとなる人物である。アブライの正確な生年もはっきりとはわかっていないが、一般に1711年ころと考えられている。その根拠は、アブライの没年が1780年夏から1781年春にかけてと考えられ³⁴、また享年は69歳と伝えられるからである³⁵。また、アブライの曾孫アフメト=ケネサリンは、アブライは1780年に70歳で亡くなったと伝えている³⁶。叙事詩には、

あなたとお別れした、あなたが73歳のときに。³⁷

68歳の金曜日に、あなたは苦しんで亡くなった。³⁸

と、ヴァリエーションによって異なる享年が謡われるが、70歳前後に亡くなったことは確かなことのようにある。なお、アブライの生年を1711年ではなく、1706年とする見解もある³⁹。これは、アブライがカルマクの宿敵シャルシュ（後述）を倒した年を1726年と推定した上で、18世紀の詩人ウムベテイ=ジュラウ Үмбетей жырау の詩「20歳になったとき、カルマクと戦ったとき/シャルシュの首

³³ Аблай хан. 93-94-б.

³⁴ 当時の書簡等によると、1780年6月にはアブライの存命が確認され、また翌81年3月に彼の死が伝えられている。Казахско-русские отношения в 17-19 веков. Алма-Ата, 1964. стр.101-103.

³⁵ ロシア将校オガレフやアブライ=ハンの息子ワリー=ハンが当時のロシア皇帝エカチェリーナ二世に送った書簡によると、彼は69歳に亡くなったと伝えられている。

³⁶ Кенесарин. А. Султаны Кенесары и Садык. Алма-Ата, 1992. стр. 55

³⁷ Аблай хан. 128-б.

³⁸ Сабалак. 238-б.

³⁹ Калибек Данияров. История Абылай-хана : государственного деятеля, полковца, дипломата, политика. Алматы, 1998. стр. 49-51.

を取ったとき⁴⁰」から算出したものである。しかしながら、カルマクのシャルシュとの戦いが、必ずしも 1726 年に行われたとは断定できず、またその時のアブライの年齢が 20 歳であったと断定する根拠にも乏しいことから、アブライの生年は 1711 年ころと考えるのが妥当であろう⁴¹。

(2)アブライの少年時代

彼は成長し、14 歳になった。/

忍耐強く、思慮深く、彼の言葉には勇気があった。

(アブルマンスルは) 父について母に訊ねた。/

母は知っていることを彼に説明した。

この地にどのようにしてさまよいながらやって来たかを

父も祖父も曾祖父も戦場でカルマクに殺されたと。

その先の先祖については知らぬと、

サルアルカに居住していたらしいと語った。

「何があってもその国へ行こう。/

わが仇を生かしてはおかぬ」と

「わが先祖三代を殺したカルマクに（攻めよう）」と

母は息子の考えを改めることができなかった。⁴²

アブルマンスルは、母から自分の故郷がサルアルカ（カザフ草原）にあることを知り、自分の祖先の故郷を探すために旅立った。彼が 14 歳のころに旅立つこの場面は、ワリハノフの「従者の忠誠心に 13 歳のアブライは助けられ、（中略）アブライはキルギス草原に向かった⁴³」という記述とも符号する。また、アブライ＝ハンの書記マメドフは 1768 年に「ジュンガルのカルマクがそこ（タシュケント）を攻撃・占領したので、10 才のアブライはアブルマンベト＝ハンが治めるトウルキスタンの町へ逃亡していった。」と伝えている⁴⁴。

このように、アブルマンスルはウルゲンチあるいはタシュケントで寡婦となった母から生まれ、十代前半にトウルキスタン・カザフ草原に向かったと考えられる。しかし、それはあてのない旅でもあった。

⁴⁰ Алдаспан. Алматы, 1971. 133-6.

⁴¹ このほかに、1713 年誕生説もある。Мұхтар Мағауин. Қазақ тарихының әліппесі. Алматы, 1995. 102-6.

⁴² Аблай хан. 94-95-б.

⁴³ Валиханов Ч.Ч. Собрание сочинений в пяти томах. Т.1. Алматы, 1967. стр.426.

⁴⁴ История Казакской литературы. т.2. Алма-Ата, 1979. стр.41.

(アブルマンズル)「我が家はウルゲンチにあったが、
トウルキスタンには我がオルダ(宿営)も、
生きていく糧もない。⁴⁵

そして、やがて彼は当時のカザフの有力者のもとに身を寄せるようになる。

幼い少年は故郷を探して、みすばらしい姿で広大な沙漠をさまよった。

祖先の生まれた地を探しながら、

トウルキスタンのアブルマンベト＝ハンのもとに着いた。⁴⁶

故郷を探して旅だったアブルマンズルが仕えたアブルマンベトは、18世紀前半のカザフのハンである。先にも触れた「名君」タウケ＝ハンのは、彼の息子セメケが継いだ。当時のカザフは内紛が起こるなど政治的に不安定で、ハンはの權威も低く、セメケがその政治的手腕を發揮することはなかつた。セメケのは、彼の甥アブルマンベトが継いだ。アブルマンベト(統治期間 1739-1771)は、セメケと同様に中ジュズ⁴⁷を中心に活躍した 18 世紀中頃のハンである。血統的には、このタウケに発する血筋が正統とされていたが、その一方で、ジャンギルの息子ワリー以降アブルマンズルにつながる家系は、傍系で正統ではないと考えられていたのである。

さて、アブルマンズル(アブライ)を特別に庇護した人物として、大ジュズを中心に実権を握っていたトレ＝ビー Төле би なる人物がいた⁴⁸。彼はタウケ＝ハンによって統治者の一人に任命され、1730-40 年代にトウルキスタン、タシュケントなどを中心に権勢を有していた。叙事詩にはトレ＝ビーを頼るアブルマンズルの様子が描かれる。

ある家を訪ねることにした。/

挨拶をしながら敷居をまたいだ。/

訪ねたその家は、ウイシン⁴⁹のトレビーの家であった。

大ジュズを治める者の家であった。/

トレビーはこの子供について訊ねた。

「名前は何だ? どの出身だ? どの町からやってきたのだ?」

⁴⁵ Аблай хан... Ақ атан. 33-б.

⁴⁶ Сабалак. 229-б.

⁴⁷ 当時、カザフには大中小3つの「ジュズ жүз」と呼ばれる部族連合体があった。大ジュズは現在のカザフスタンの東部、セミレチエ地方を中心に広がっていた。

⁴⁸ Дәуітов Сәрсенбі. Төле би. Алматы. 1991. 10-б.; Моисеев В.А. Трудные годы. История Казахстана: Белые пятна. Алма-Ата, 1991. стр. 5.

⁴⁹ Уйшин үйсін は大ジュズの主要部族のひとつ。

「私は自分のことをよく知らぬのです。
両親や先祖、故郷も親族ありません。
私に名前を名づけてください。/
カザフの国、私の国を探してやってきたのです。」
（彼は）長く切らなかった髪が伸びすぎていた。
ばさばさの黒い帽子のように見えた。
頭が垢まみれになっていたので、
彼に「サバラク」という名が付けられた。⁵⁰

アブルマンスルの乱れた髪を見て、トレ=ビーは「サバラク」と命名した。「サバラク сабалақ」とはカザフ語で「髪が乱れている」という意味である。こうして、長旅でみすばらしい姿になっていたアブルマンスルは「サバラク」と呼ばれるようになり、トレ=ビーのもとで牧民として働く。

ここに留まり、ラクダを世話せよ。/
トレ=ビーはそう言って、笑って（彼を）受け入れた。⁵¹

彼はトレの片腕となった。/
歳に比べて、力は優れ、賢かった。/
命じられたどんな仕事も喜んでやった。/
（ビーは）この子供に注目し、あらゆることをやらせて試した。⁵²

トレ=ビーは、将来アブライ=ハンとなる少年サバラクを牧民として使いながら、彼の才能に注目し、その力を試していた。非凡な能力を発揮するサバラクは、指導者としての能力にも長けていることが詩には語られている。その逸話を示そう。

ビーはある宴に招かれた。
（サバラクを）試そうとサルクトを持ってきた。/
トレ=ビーの従者は彼に（羊の）頭を与えた。/
（サバラクは）泉で手を洗い、たくさんの仲間を呼んだ。
彼らに目や耳を与えた。自分は唇の部分を食べた。/

⁵⁰ Сабалақ - Аблай хан. 131-132-б.

⁵¹ Аблай хан... Ақ атан. 33-б.

⁵² Аблай хан. 96-б.

従者はトレ=ビーの家に戻り、見たことすべてを話した。

(トレ=ビーは彼が) 尊敬すべきハンの末裔の王子に違いないと察した。/

(サバラクの) 行いはすべて非凡であった。

トレ=ビーは彼に心引かれた。⁵³

サルクト саркыт とは、「余った料理」を意味する言葉であるが、転じて宴の席で余った料理をそこに加われなかった人に分け与えるという、カザフの習慣を指すこともあった。トレ=ビーは、普段は口にするのできない羊の頭をサバラクにサルクトとして与えることで、彼がどう行動するかを試してみたのである。サバラクは客人を饗応する際に与えられる、耳や目といった美味とされる部分を仲間に寛大に分け与えた。このことは、彼に卓越した指導力があり、高貴なる血筋を引く少年であることをトレ=ビーに知らしめた逸話として、口頭伝承で広く伝えられているが、実際は当初よりサバラクの血統を知っていて、彼を庇護したと考えるのが自然であろう。あるいは、トレ=ビーは自分の勢力拡大にサバラク（アブライ）を利用したのかもしれない。

(3)アブライの出陣

トレのもとで成長し、指導者としての頭角を表したサバラクは、やがて、カルマクの度重なる攻撃の知らせを聞く。そして、先祖代々の仇討ちのため、戦闘への参加を決意する。

シャルシュがカルマクを率いて攻めてきた、

カザフを奪い取ろうとして押し寄せた。/

サバラクも出陣の準備をした。

若いから無理だとの言葉を聞きいれず。

(トレ=ビー)「おまえは若い。敵に立ち向かうな。

槍に立ち向かえば屍となろう。

アウル⁵⁴にいても戦うのに等しい。

獣の敵から家畜を守るならば。」

(サバラク)「仇のために母を捨てて来たのです。

我が心をぼろくずのようにしてまで来のです。

先祖の血の仇を取れずに、カルマクの奴隷となるために

⁵³ Sabalaq. 295-297-b..

⁵⁴ アウルは、数戸から十数戸からなる、遊牧を行うための基本集団のこと。

私は生まれてきたのでしょうか？」⁵⁵

そして、出撃を志すサバラクは、その名が知れ渡る勇士ボゲンバイと知りあい、彼にカルマクへの攻撃に同行する許可を願い出る。

カンジュガル⁵⁶の老兵ボゲンバイが、

ある日（トレの）もとに来了。

カルマクに向かう途中であった。

仲間の兵士を率いて。

サバラクはボゲンバイに言った。

「私も一緒に連れていってください」と。

（ボゲンバイ）「おまえを連れていこう！少年よ！」⁵⁶

ボゲンバイ Бөгенбай は 1720-30 年代にカルマクの攻撃に立ち向かったカザフ軍の司令官として戦ったバトゥル（勇士）である⁵⁷。彼はすでに 1710 年代には司令官としての実権を握っていたといわれる。たとえば、1710 年からその翌年にかけてカルマクがカザフに猛攻撃をかけたときに、カラクムに各ジュズの代表が集まって、司令官にボゲンバイを選出したという⁵⁸。彼を中心としたカザフの反撃によって、失った牧地を回復しただけでなく、カルマク（ジュンガル）の領域にまで侵攻し、多くの捕虜や家畜を得た。しかし、このような反撃もむなしく、1713 年にはすでにカルマク（ジュンガル）の反撃を受け、カルマクのカザフ攻撃はさらに激しさを増していくのである。

なお、カンジュガルҚанжығалы とは中ジュズのアルグン族 Арғын に属する集団である⁵⁹。のちにアブライがアルグンの指導者となり、アルグンの遊牧地コクシェタウなどがその本拠地となった背景には、このようなボゲンバイとの深い関係があるのかもしれない。

さて、アブルマンズルが祖父や父の仇を取ることを強く望んでいることを理解したトレ=ビーはボゲンバイに彼を託し、馬を与え、別れを告げる。

16 歳になったとき、ボゲンバイがやってきた。

サバラクの内心を理解したのか、

⁵⁵ Аблай хан. 98-99-б.

⁵⁶ Sabaraq. 298-b..

⁵⁷ Валиханов Ч.Ч. Собрание сочинений в пяти томах. Т.1. Алматы, 1967. стр.662.

⁵⁸ Сулейменов Р.Б., Моисеев В.А. Из истории казахстана 18 века. стр.20.

⁵⁹ Шежіре. қазақтың ру-тайпалық құрылысы. Алматы. 1991. 23-б.

トレビーは（彼を）ボゲンバイに託した。⁶⁰

（サバラクは）馬群から一頭の馬を選んで乗った。/

トレビーは手を挙げてバタを唱えた。/

「ルスタムのダスタンのように有名になるように。

少年よ、いずこへ行っても無事であるように。

多くの人々におまえの情熱を示すように。

おまえに無数の兵士が従うように。

セイトバツタルや勇士タルグンのように

神が長生きさせるように！」⁶¹

バタ бата とは祈祷・祝福の言葉である。若い世代に対して、礼儀正しく、忍耐強く、慎み深くあるようにと願い、また家畜に富み、故国を守る勇敢な勇士になるようにと祈願して唱えられた⁶²。また、別れに際して幸運と無事を願って、旅に出る者や出征する勇士に唱えられることがしばしばあった。叙事詩にはバタを唱える場面が多く描かれるが、それは、アブライに関する叙事詩にも例外ではない。

トレビーのバタに、ルスタムやセイトバツタル、エル=タルグンなどのテュルク系叙事詩の主人公が勇士の手本とされて、謡われていることはたいへん興味深い。ちなみにアブライ自身もすぐれた勇士の模範として、バタに謡われている。

幼少のアブライの庇護者がトレビーではなく、ダウレット=バイであると謡うヴァリエントもある。そのヴァリエントによると、トゥルキスタンにやってきたアブライと彼の付き人ウラズが、ダウレットのもとでしばし滞在している。ワリハノフもこれとよく似た逸話を書き記している。「伝説によると、トゥルキスタンから近い親類であるアブルマンベトのもとへ向かっていたアブライは、事情により、祖父（子守り男）ウラズや一頭の馬とヤクシリクのダウレットバイの治めるカラウルス出身のカザフ人のもとで過ごしていた。そこでアブライは馬群を見張る仕事をしていて。彼の主はウラズを通じてアブライの出自について知り、名馬を彼に与え、アブルマンベトのところへ連れていった。

⁶³」また、別のヴァリエントでは、トレビーのもとを離れたアブライがダウレットバイという有力者の

⁶⁰ Аблай хан... Ақ атаң. 34-б.

⁶¹ Sabaraq. 299-b.

⁶² Негитов С., Казипұлы Т.(құраст.). Ақ бата, бата сөздер. Алматы, 1992. 5-б.

⁶³ Валиханов Ч.Ч. Собрание сочинений в пяти томах. т.1. Алматы. 1984. стр.217.

もとに身を寄せる様子が謡われており、アブライはトレビーやダウレトバイなど複数の有力者の庇護を受けていたことがうかがえる。

このような有力者に庇護されたことやボゲンバイなど当時の著名なバトゥルたちに随従し、その頭角をあらわしたことが、アブライのその後の勢力拡大、ひいてはハン即位に大きく貢献していると、叙事詩からは読み取れるのである。また、トレビーやボゲンバイらも、「傍系」とはいえハンの血を引くアブライを庇護することで、ハンの權威が弱まり、群雄割拠していた当時のカザフ社会で、各々の勢力を拡大し、自分の権力を強化しようと考えたのではないだろうか。

さて、ボゲンバイに従うようになったサバラクは、カルマクと干戈を交えるため、長い行軍を行う。

サバラクはバトゥル（ボゲンバイ）に従い、 /

カラタル川やイリ川⁶⁴を沿って進み、

多くの川を渡った。⁶⁵

叙事詩は敵カルマクの統治者や勇士について、次のように謡っている。

ジョンガルでは新たに、カルダン=セレンがハンになった。

腕から武器を捨てることなく、カザフの仇敵となった。⁶⁶

カルマクの随一のバトゥルはシャルシュであった。

ガルダンハンは彼を高く評価していた。 /

広大な国にもシャルシュに比肩するものはなかった。⁶⁷

詩中のカルダン=セレン（ガルダン）とは、1730-40年代のジュンガルの統治者ガルダン=ツェレン（1671-1745）のことである。彼は、カザフ草原南部やシル川流域への攻撃を指揮し、ジュンガルに最盛期をもたらせた統治者のひとりとなった。

シャルシュは、叙事詩ではガルダン=ツェレンの息子あるいは弟として描かれる。シャルシュとアブライとの戦いは多くの詩歌に謡われ、カルマクを代表する勇士として知られているが、彼の詳細については不明である。

⁶⁴ いずれも、バルハシ湖に注ぐ、セミレチエ地方の川。

⁶⁵ Аблай хан... Ақ атан. 34-б.

⁶⁶ Аблай хан... Ақ атан. 35-б.

⁶⁷ Аблай хан. 105-б.

このシャルシュとの一騎討ちを望むサバラクは、ボゲンバイにその許可を求める。

ボゲンバイ自身が出撃しようとしたことや

アブラマンベトの（サバラクの出撃を認めぬ）言葉に満足せずに

（サバラクは）私が行こうと許可を求めた。

サバラクはボゲンバイのもとへ行き、ひざまずいた。 /

四代前からの我が先祖の仇を倒そうと。⁶⁸

そして、ボゲンバイから許可を得たサバラクは、バタを求めて、敵に向かって出撃する。

鎧兜を身に付けて「赤い馬」に乗った

見知らぬ少年がバタを求めている。 /

「アッラーよ、アルワクよ、人々よ

私にバタを与えよ。」 /

「敵の大軍を倒して無事に戻って来い」 /

勇士サバラクはバタを受けて疾走した。⁶⁹

カザフ人にはイスラームやシャマニズムとならんで祖先崇拜の信仰があった。人々は、困難に陥ったときや助力を必要とするときに先祖の魂であるアルワク *арыак* に願をかけた。ここでは、アブライもアルワクに願をかけている。また戦闘のみならず、流行病や不妊、旱魃、飢饉、天災などのときにも、人々はアルワクに助力を求めた。アルワクにたいする信仰は、カザフだけでなくクルグズやウズベクなど、中央ユーラシア＝テュルク系民族に広く見られる。

そしてついに、サバラクとシャルシュとの一騎討ちが始まる。

（シャルシュ）「まず貴様に先攻の権利を与えよう。

その後、おまえの首を斬り落としてやる。」

（サバラク）「シャルシュよ、先攻はカルマクだ。

古くからのしきたりを変えるな。」 /

（シャルシュは）大きな手で鋭い槍をつかみ近づいていった。

白い鎧に目を向けると光が閃いた。 /

サバラクは「アブライ」というウランを叫んだ。 /

⁶⁸ Аблай хан. 106-6.

⁶⁹ Sabaraq. 301-302-b.。

一尋の鞭を「黄色い五歳馬」に打って、

跳びはねて駆けて攻めた。

鋭い刀がうなじから音をたてて、シャルシュの頭がすばやく落ちた。/

(サバラクは) 馬を再び翻し跳びはねながら戻った。⁷⁰

シャルシュは馬から落ちた。塵埃を高く巻き上げて。

サバラクはこの戦いで、最初の勇姿を示した。⁷¹

叙事詩は戦闘のしきたりについても伝える。ここでは、一騎打ちの決闘はカルマクの先攻、カザフの後攻と決まっていたことが伝えられており、騎士道ともいえるようなルールにのっとりた戦いの叙述は、勇士の高貴な精神を理想化しているといえよう。サバラクはこうしたしきたりに則って、敵に勝利したのであった。

ところで、サバラクは戦いに際して「アブライ」と叫んでいる。これはウラン ұран といわれる、戦場における「闘の声」のことである。中央ユーラシア＝テュルクには古くから、それぞれの部族集団に固有のウランがあり、そのほとんどが部族の著名な勇士や祖先の名前を用いたものである。一般に、ウランは一部族にひとつであるが、いくつかのウランを使う部族もある。また全カザフに共通する「アラシュ Алаш」というウランや、各ジュズにそれぞれ共通して使われるウランもある。さらに部族のウランとは別に、個人が自分自身の祖先の名をウランに用いることもあり、サバラクが叫んだ「アブライ」などはこれにあたる。なお、「アブライ」という名も 18 世紀中ころからカザフ人に共通のウランになったといわれている⁷²。

さて、サバラクがアブライを名乗るようになったのは、彼が「アブライ」のウランを叫んだことに由来すると伝えられる。

(アブルマンベト)「少年よ、何ゆえウランを「アブライ」と叫んだのか」。

このくににはないこのようなウランをどこから見つけたのか?」/

少年は言った。「アブライは私の偉大な祖父です。

名の知れた無敵の勇士でした。/

我が敵に勝つために(その名を)叫んだのです。/

祖父は自分の名を自分で叫ぶことはなかったので、

⁷⁰ Аблай хан. 107-8-б.

⁷¹ Аблай хан... Ақ атаң. 37-б.

⁷² Ақ бата. Бата сөздер. 159-б.

このウランを人々は知らなかったのです。⁷³

(アブルマンベト)「おまえは怯むことなく

敵に「アブライ」と叫んで向かった。

余はこの少年が何をするのかと思ったものだ。/

今ここで、おまえに「アブライ」という名をつけよう。

サバラクの名もアブルマンスルの名もここに捨てよ。

これでおまえの先祖アブライの名が消えることはない。

天の星が輝くように！」

サバラクはこれ以後アブライと名乗った。

年老いた老人からバタを受けた。

彼の名声と名は人から人へと伝わり、

その勇敢さは国中に知れ渡った。⁷⁴

叙事詩は、合戦でカルマクの勇士シャルシュを倒したサバラクが、その偉勲を当時のハン、アブルマンベトに認められたと謡う。また、サバラクは、祖父「カンイシエル=アブライ」の靈力にあやかって敵を打ち破ろうとして、祖父の名をウランとして叫んだことから、アブルマンベト=ハンによって「アブライ」と命名されたのであった。以後、彼はこの名前で世に知られるようになるのである。なお、この逸話には、アブライが祖父「カンイシエル=アブライ」の名を復活させて、人々の記憶に残そうとする祖先崇拜的な側面も見取れる。

そして、自分の先祖や故郷について知るために長い旅を続けて来たアブライが、ついに自分の出自の詳細について知るときが来た。先祖や故郷について尋ねるアブルマンベトに、アブライは次のように答える。

(アブライ) 我が遠き祖先はワリバク。

その後の祖先は「血のアブライ」。

我が父「美しきワリー」という人が、

私にアブルマンスルと名づけた。

これらの先祖はみな勇士であった。

誰もが戦闘では千人分に値した。

⁷³ Аблай хан. 110-б.

我が祖先はみな敵に殺された。

我が心にはつきることのない悲しみがある。」/

少年にアブルマンベトはこう言った。

「おまえの祖先はエシム＝ハンだ。

エシム＝ハンからジャンギルが生まれた。

ジャンギルからはワリバクとアズ＝タウケが、

タウケからはアブルカユルとボラトが生まれた。

ボラトからはセメケとアブルマンベトが生まれた。

アブルマンスルよ、おまえは余にとって親類にあたるのだ。

この先祖の系譜を忘れずに覚えておくのだ。/

おまえの故郷はアラシュなのだ。/

余はアズタウケの孫、

そしておまえはワリーの曾孫なのだ。」⁷⁵

系譜はカザフ人をはじめ中央ユーラシア＝テュルク系民族にとってきわめて重要な存在であった。カザフ人同士が出会ったときに、系譜によって関係が近ければそれだけ特別な援助やもてなしを受けることができた。また、結婚に際しては、共通の先祖から七代以上離れている必要があった。カザフ人はたとえ 8 歳の少年でも自分の先祖を少なくとも六代までそらんじることができたという。チンギス＝ハンの血を継いだ人物が歴代のハン位に就いていたことは上述のとおりであるが、ハンの血筋を引く者にとって系譜の知識はとくに不可欠なものであった。そのため、曾祖父のワリバク（ワリー）までの系譜しか知らないアブライにたいして、アブルマンベトはエシムまで遡る系譜を教えたのであった。エシムから連なるアブルマンベトの系譜は、ワリハノフ⁷⁶やリョーフシン⁷⁷のものと一致しているが、ボラトとセメケについては、ワリハノフやボケイハノフ⁷⁸の系譜では父子ではなく、兄弟とされており、こちらが一般に流布されている。

自分の由緒ある出自や栄誉ある祖先について知り、血縁者アブルマンベトの庇護を受け、名を「アブライ」と改めた少年は、その後次第にその勢力を拡大し、カザフ社会の統治者へとになっていくのである。

⁷⁴ Аблай хан. 111-б.

⁷⁵ Аблай хан. 110-11-б.

⁷⁶ Валиханов Ч.Ч. Собрание сочинений в пяти томах. т.4. Алматы, 1985. стр.174.

⁷⁷ Левшин А.И. Описание киргиз-казачьих, или киргиз-кайсацких, орд и степей. Алматы, 1996. стр.161.

⁷⁸ Алихан Букейхан. Избранное. Алматы, 1995. стр.114.

おわりに

叙事詩が伝えるところでは、チンギス=ハンの血を受け継ぐアブライは苦難の幼年時代を過ごしなが、カルマクに殺害されたとされる4代前からの祖先の仇討ち志し、ついにカルマクの勇士と戦い、次第に頭角を表していった。また、その背景には、トレ=ビーやボゲンバイ、アブルマンベトといった有力者の強い後ろ盾があったことが、叙事詩からうかがえるのである。

最後に、本稿では触れなかった、叙事詩が伝える「その後のアブライ」について簡単に述べたい。アブライはその後も、長年にわたってカルマクとの抗争を続けた。ある日、彼はカルマクの捕虜となり、ガルダン=ツェレンのもと囚われの身となるのだが、カルマクの首領ガルダン=ツェレンとの毅然とした態度でのやりとりの末、解放される。その後、アブライはバランスの取れた巧みな外交手腕で、ロシアや清朝と交易を中心とした関係を発展させ、その一方で、コーカンドやクルグズには遠征を行うなど、活発な外交活動を展開させた⁷⁹。カザフの人々に認められたアブライは、古来からの伝統的なしきたり⁸⁰に則って、ハンに即位する。そして、「中心に立つ黄金の支柱⁸¹」と称えられたアブライは、

「このように団結していよ。

(そうすれば) いかなる外敵にも敗れぬであろう。/

幸と富は団結にあり、との言葉は真実である。」⁸²

という言葉を残して天寿を全うした。そして、その遺体は聖地トゥルキスタンに埋葬されたのであった。

アブライの虜囚やロシア・清朝に対する二重朝貢、当時の交易については、当時の書簡や遣使の報告、外交文書などの史料からうかがい知ることができるが、叙事詩にもこれらに関する独自の情報が織り込まれている。それらは、アブライの内政・外交政策や18世紀のカザフ社会を研究する上で示唆を与えるが、今回は紙幅の関係で詳しく述べるができなかった。別の機会に改めたいと思う。

(さかい ひろき・北大スラブ研究センター)

⁷⁹ 実際には、1755年にカルマク(ジュンガル)が清朝によって滅ぼされたことにより、カザフ社会に一定の安定がもたらされたことがその背景にある。

⁸⁰ 「白いフェルトに新しいハンを座らせ、四人でフェルトの四隅をつかんで、持ち上げる」という儀式。

⁸¹ Аблай хан. 124-6.

⁸² Аблайдың тарихы. 281-6.